



心萎えよ肉には眠りを

for adult.



・クエストを受ける

CONTENTS

03 「愛しき者の奥を射る物は」

04 「祝い踊るこの夜君のために」

05 「共に願う生還の叫び」

06 「樹海と魔物と術式についてⅠ」

07 「樹海と魔物と術式についてⅡ」

08 「名声の代償は栄誉か嫉妬か」

09 「氷姫が決る者たち」

10 「肉体の歪」

11 「呪い尽きる事もなく」

12 「さあ冒険を始めたまえ！」



「おいかマン子。我々はインペリアルクロスという陣形で戦う。全裸に幸運のネックレス一丁のマン子が先頭、防御力の高い私が後衛につく。お前のホシジョンが一番危険だ。覚悟して戦え」











「いーよ、私もキミのこと、嫌いじゃないし、初めてになって上げるよ、任じときなね？」

「そういって、少女は一点の恥じらいもためらいも見せず胸を覆っている布を取り払った。」

「ふるん、という首が聞こえそうなほど、豊かな乳房がさらけ出された。褐色の肌は何処までもきめ細やかで、上質のビロードを思わせる。その頂点でピンク色に色づく乳輪と乳首は、夜の闇に咲いた桜の花びらのようだ。まるで果実のような大きさを誇りながらも、たるみはまるでない。ハリを保って少年を挑発するかのようになを仰いでいた。」

「……うわあ……」

「ハラデインの少年ははしたなく生唾を飲み込み、エツツの巨乳に見入ってしまう。乳果実からふんわりと甘い香りすら漂ってきてそ

うで、少年の股間はそれだけで力強くみなぎってくる。

「あたしのおっぱいおっきいでしょ。だからね、こんな事も出来るんだ」

「バードの少女は若い騎士の視線に気づくと優しく微笑み、少年をベッドに押し倒した。そしてスポンの腰ひもをするりとほどいてしまう。」

「あ、あの……ちよん……」

「突然の展開にいつもの鉄壁は何処へやら、とまどう少年は防衛も出来ずそのまま下半身のチャートをばき取られてしまった。あっとの間に肉棒が挿れられてしまう。先達の給口から透明な先走り液すら溢れを覚えて、少年のイキモツは切なげにしゃくれ上がった。」

「あたしのおっぱい、たっぷり味わってね……」

「そういって、バードの少女は少年の肉棒を、その豊かな乳房で挟み込んでしまった。」

「ひああ……」

少年のヘニスに乳肌が触れた瞬間、若き騎士は全身をビクリと震わせて少女のような喘ぎ声を上げた。少女の乳肌はしっとり汗に濡れて、まるで肉棒に吸い付いてくるようだった。そして何処までも沈み込めぬような柔らかさで圧迫される感覚は、自分の手などとは比べものにならない。腰の奥に甘い電流が駆けめぐり、それだけで射撃してしまいたい。『無理しなくてもいいんだよ、ほら、ほら』

「黒いほく笑った褐色の少女は、少年のイキモツをさらに激しく責め立てる。二つの胸を両手で挟みこみ、軟らかな肉ががちのヘニスを扱き立てたのだ。大きな乳房は根本から裏筋までをまっぴんなくカバーし、全体から優しく肉棒を包み込んでいた。少女が手で優しく挟み込み、上下に乳房を波打たせるたびにむたむたに敏感な棒が柔らかく圧迫され、

ソクソクするほどの愉快が駆けめぐり、巨乳に顔を浮かべながら、必死に耐える少年だったがバードの少女は攻めの手をゆるめなかった。乳房の間からうっすら先走り液を覗かせている亀頭がぷりぷりと吸い付いたのだ。そして舌先でチロチロと溢れる汁をすくうように刺す。

「あっ……ああっ……も……ダメです……」

「乳肌の心地よさだけでなくもう夢見心地だった少年にそれがとめどなくなつた。少女の胸の中で少年の肉棒が弾け、勢いよく白濁液が迸った。毛リのような粘度と、熱湯のような熱さを持った濃厚な汁が褐色の胸に、そして肌を飛び散る。」

「おっぱい気持ちよかった？……でも、もっと気持ち良いことがあるんだよ。これから一杯、一杯しよう？ だからさ……明日は死んじや、ダメだよ。絶対に。生きて帰って……またしようよね……」

「前人未踏の地25Fに挑む前夜、少年と少女は心ゆくまで噛み合い、生唾を噛み合った。」



「も……入らない……はいるわっ……はっ……おおあああああ  
あっっっ!! むり……い、よおおっっ……」

アルケミスト娘の腹がほこりと蠢いた。秘誓はすでにはち切れ  
んばかりに拡張され、血の気を失うまでに伸びきっていた。そこ  
にめり込んでいるのは「危険な花びら」のつぼみであった。表面  
にはえた産毛のようなものが異常な挿入で敏感になった腹をくす  
くるたびに、脳裏で桃色をした核熱の術式が放たれる。

つぼみの先端は子宮の中にまで押し込まれているようで、へニ  
スの魚頭にも似た先が子宮奥を挟むたびに股間が爆発してしま  
い、そうなるほどの快感衝撃が全身にかつんと響き渡った。下半身が煮  
解けそうに甘く、それでいて脳天には雷光の術式のように鋭く突  
き刺さる悦楽に

「はあああああ……っっ……っっ!!」  
と情けない声を上げて、あっけなく絶頂に登り詰めてしま  
う。細身な身体が骨も折れよとのけぞり返り、股間から蜜液がぶ  
しゃっと吹き上がった。

……これでもう何度目の絶頂だったろうか? 「眠りの花粉」  
を嫌というほど吸い込まされ、もうろうとした意識では覚えても  
いられなかった。眠りの、というだけはあって麻酔効果のような  
物があるのか、普通ならとつづくに殺されているような瞬間にも不  
幸にも耐えられてしまっていた。

一緒に採取を行っていた仲間があっさり眠らされ、とつづくに皆  
殺しにされているのか声一つ聞こえてない。  
「ひい……あ……っ……っ……ひ……人間……はあ……あいに  
……種なんか植えてもむらら……わか……ら……らいるお  
……っ……」

いつも朗々と術式を奏でる口はもうるれつが回っておらず、  
舌つ足らずならしなしいしゃべり方になってしまっていた。唇か  
らは涙のようにヨダレを垂れ流し、真っ赤な舌が苦しげに震えて  
いる。理知的な印象を与える眼鏡は自らがこぼした涙でくしょく  
しょと濡れ、普段の伶俐な印象は面影も残っていないかった。

ツタに引き裂かれてまるび出た乳房は、着やせするタイ  
プなのが意外にも豊かであった。その胸にも触手のようなな  
ツルが巻き付き、根元から絞り上げるように力強くもみ上  
げてくる。とがった茨が、負けずにとがった乳房に刺される  
たびに胸を甘く焼きこがす。

「やらあ……やら……っ……の……く……っ!! か……は  
……あ……」  
人ならぬ植物の悲しき、アルケミの哀願など理解できな  
い魔物はなお責めを強めた。  
ゴリ、ゴリ……と容赦なく堅いつぼみをもっと奥へと温  
り込んでいく。その度に花びらがピンピンにしり立った  
クリトリスに激しく触れた。小指の先ほどまでは膨れあ  
がった淫核は、つぼみがわずかに動く度に根元から折り取  
られそうなるほど強烈に巻き込もうとするのだ。  
心臓が止まりそうなるほどの悦楽電流が何度も何度も駆け

「はあ……はあ……おれが……おれがいらから、も  
うめいて……これいひょうされたら、こわれてひまふろ  
……」  
研究したことも知識を得たこともない未知の肉体反応  
に、アルケミストの娘は恐怖すら覚えていた。

「はあ……はあ……おれが……おれがいらから、も  
うめいて……これいひょうされたら、こわれてひまふろ  
……」  
研究したことも知識を得たこともない未知の肉体反応  
に、アルケミストの娘は恐怖すら覚えていた。



「あはっ……はぁ……あ……っ……あ……」  
珍らしい色をした芋虫の産卵管がアルケミスト娘の  
腹間を容赦なく振り回す

つぼみよりは弾力性があり、太くもなかったが、逆  
に「平均サイズよりちよつと上」のそれは娘の開発さ  
れきつた子宮と固くはとも良くもなした。

敏感な粘膜をトゲでかきむしられるたびに甘美な痛  
みが脳を焼き、先端が子宮口を「コンッッッ」と強く  
突きたびに

「……きひいらっつっ……お……お……」  
腰骨を貫く甘い衝撃に下半身が痺れる。

危険なつぼみから逃れられたのは幸運だったの  
だろうか。ハーティをおっさり皆殺しにされるほどツ  
いていない彼女にとっては、そう思えたかも知れない  
だがそれはさらなる不運と淫速宮への入り口にすぎな  
かった。

股間から愛液を垂らしながら逃げ延びた彼女は近く  
でわき出る樹液を見つけた。わらをもすがる思いで近  
づいたのだが……結果はこの様だ。どこからともな  
く現れた「毒牙の芋虫」相手に、ほとんど瀕死の彼女  
がどうこうできるはずもなかった。  
毒牙の芋虫たちは、アルケミストの娘を苗床に運ん  
だようだった。子宮の奥まで深々と刺さった産卵管の

先からは耐えることなく熱いマグマのような白濁液を  
注ぎ込み、生殖行為を繰り返していた。もう子宮がほ  
ち切れんばかりに注ぎ込まれ、ほっそりしていたお  
腹はほこりと飛び出しているほどだ。

「はぁ……あ……やぶ……れ……るっ……おらかか  
……やぶれええ……」  
ひゆるっ、ひゆるっ！ と勢いよく白濁液が発射さ  
れるたびに強烈な水流が奥を叩く。それだけでも絶頂  
物だというのは、さらに攪拌された水流が子宮内腔の  
もつとも敏感な部分をもみ洗いしてくるのだ。激流の  
ような汁は子宮頸部のPスポットをしたたかに刺激す  
る。人の手でもペニスでも、そして触手でも到底不可  
能なところをしたたかに刺激されてしまう。

「かはあつっつ……！！ おあああああああ……  
がっ……うお……あ……あつ……！！」  
狭い空間で渦を巻くように煮く白濁液の流れは子宮  
を揉みしほっているかのような強烈な悦楽をわざとこ  
し、もつと大きな渦となって錬金術の使い手を飲み込  
んでいく。  
目の前で極彩色に彩られた超核熱の術式が何度も何  
度も炸裂した。娘の口がハクハクと腫れ上がった魚の  
ように開閉を繰り返し、グロープに包まれた指が痙攣  
するかのよう細かく震える。三四分の芋虫の精液に

まみれた全身は真っ白に濡れをほり、救いを求めるよ  
うに開閉する指先からほたほたと虫汁が滴り落ちた。  
もはや腹と子宮が限界に達したと悟った芋虫は、さ  
らに尻穴にも注入を始める。前を犯す産卵管に負けず  
劣らずの異物は、薄皮一枚閉てて敏感な直腸粘膜と膈  
を風船からすりつぶしながら、賢一枚二枚にすり込む  
ように丹念に白濁液をぶちまけていった。

「あああああ……っつっ……！！ おっっ……う  
……お……！！」  
本来ならば排泄する器官に挿入され、あまつさえも  
その中に注入を受けているというのに、そのおぞまし  
い感覚でさえも今のアルケミストにとっては極上の  
快感にしか思えない。

一本の管が狭い穴の中でタイミングを計ったかのよ  
うに律動するたびに、前の穴からは白濁汁の混じった  
愛液を、後ろの穴からは黄色ばんだ腸液を垂れ流して  
浅ましくいきまわってしまつたのだ。  
絶頂の連続に徐々に痺れていく思考力。濁りきった  
思考の中で、錬金術師の娘はふと思った。  
（ああ……こいひやら……わらひと……いつひやらっ  
たんら……）  
世界樹の迷宮に住まう魔物は女の肉を淫らな苗床に  
変貌させてしまう錬金術師達だったのだ、と。

07 F



「んああああっ……」

薄暗い倉庫の中に、ガンナー少女の嬌声が響き渡った。太い銃身が股間に突き刺さり、銃口がくりくりと子宮口を押し揉んでくる。無骨な鉄のかたまりは少女の未発達な腹粘膜を容赦なく抉り、鈍い痛みを送り込んだ。自己防衛的に愛液はわき出し始めてはいる物の、それで苦痛が和らぐわけでもないし、人ではなく異物による処女喪失の怖しさが紛れるわけでもない

「つく……」

あたしにこんな事して、どうしようっ

……このよ……！ これであんたらが強くなれるわけ

じゃないでしょ……！

彼女が所属するハーティは破竹の勢いで迷宮を踏破し、その名前は二気に高まった。だが、急激な成功は嫉妬を呼ぶものである。理不尽な妬みをぶつけるかのように、男は無言で突き立てた銃を前後に動かした。乱暴にはなく、銃身

の太さになじみ始めた腹をなだめるようにゆっくり、

そして少しずつ、見た目の無骨さからはとても想像も

出来ないような繊細な動きだ。

「んっ……うっっ……」

吊られた身体がふるっと震えた。ひりひりと引き裂

くような痛みしが伝えてこなかった粘膜を擦られる感

触が、一転して甘い痺れのような物を送り始めた。こ

つんこつんとリズムミカルに叩かれる子宮が甘美な疼き

を発し、全身の体温が上がっていく。体中にほの香る

汗が清々とわき立ち、薄暗い倉庫の中に淫靡な香りが

充満し始めた

ガンナーの少女に性感が産まれ始めたことを悟った

男は、銃の動きを変えた。大きなストロークで銃を引

き抜き、クリトリスの腹を擦りながら、一気に奥まで

貫き通す。くじゅんっ!! という濡れ音と共に銃口が

子宮口に叩き付けられた。

「ひいひいひいっ……」

その瞬間腰の奥から快感の大波がわき起こった。波

は二気に全身を覆い尽くして脳天を直撃し、少女の脳

裏を白く押し流しかける。スレンダリな身体がひとき

わ大きくのけぞり返り、背も折れよとはかりにじなっ

た。

銃身と秘膺のわずかな間から、水鉄砲のように勢い

よく愛液がびゅるっと飛び出してくる。

「ひゃんんんっっ!! ……う……なに……なに、

撃ったの……あたしの中で……」

まともな性交の経験も自慰の経験もない少女にとっ

ては、絶頂の衝撃は銃の発砲に勘違いするほどの

ショックだったのだ。

だが、ガンナーの少女を撃ち抜く快楽の弾丸はまだ

かすった程度。これからが本番であった。



「いいいやあああつ……もつそれ以上奥、ないから……」

スキュレーの魚介類にも似た足がドクトルマグスの秘部を深々と貫いた。無数の吸盤はそれ自体がイボのような役目を果たし、少女の腹内をゴリゴリと抉り倒す。敏感粘膜がかた柔らかい不思議な感触でかきこすられる度に、トレードマークの帽子がすり落ちそうなほどに頭をのけぞらせた。それだけでも思も絶え絶えたというのに、もつとも敏感なクリトリスや乳首にすら吸盤触手は絡みついていく。感度を増したその場所がキュウツと吸い付かれ、好き放題吸い上げられてから「ひんんんんんっっ!!!」

キュボンツと勢いよく離される。それが無数の吸盤で幾度と無く繰り返されるのだ。濃厚なキス責めを無限に食らっているかのような過酷な責めは、ドクトルマグスの少女の敏感肉豆をさんさんに打ちのめした。吸われ、引っ張られ、離されるのワ

ンセットごとに愛液が、時には潮もしぶき、凍り付いた地面に湯気を立てて滴り落ちていった。

もし彼女がドクトルマグスでなければとくにイキすぎて絶命していたらろう。だが、皮肉なことに彼女がハーティ全員に施した「巫術・皮硬化」と「精霊の守り」が苦痛を……いや、快楽を長引かせる結果となった。死にたくても死ねないのだ。強化された肉体は腹がふくれるほどの触手にもかろうじて耐え、守りは度重なる絶頂で消耗した体力を少量とはいえ回復させ続けていく

吸盤でクリトリスを吸われながら、さらに腹内からクリの本を吸われながら擦られると、股間から爆発的な快感がわき起こる。その上GスポットやPスポットを同時に吸い立てられて「一気にズンツツと強く突き立てられてはたまらなかった。どんな女でも耐えることなど出来るわけのない圧倒的な悦びの奔



流が全身を支配する。全身がどうしようもなく震え上がり、心臓が止まりそうなほどの絶頂感に身を震わせて叫ぶことしかできなかった

「くあああああああああ あつっつっつ!!!」  
「おおあああつっつうあああ あつっつっつ!!!」  
喘ぎ声というより、痛切な叫び声が偶然重なった。随喜の涙がかすむ瞳で面をした方を見上げてみれば、ハーティの少女もまた太いたこ足の

ような触手に深々と貫かれ、悶絶を繰り返していた。股間から滝のように愛液を垂れ流し、もうほとんど意識もないのか時折叫びながらびくびく

と震えているだけだ。鉄壁を穿った鐘は脱がされずに、股間部分のみはぎ取られて犯されているのが哀れた。他のハーティの姿は見えないが、時折喘ぎ声やらうめき声は聞こえてきている。だが、それもだんだん弱くなってきているようだ。彼女がかけた巫術の硬化時間が限界に来て

いるのだ。そうなれば、皆々ダでは済まないだろう。(ああ……ごめんませい……アーティンデ……同業のよしみで何とかしてあげたかったのに……) その思いを最後に、彼女の思考はとぎれた。



「ぎひいっ……!!」(あく……)  
あ……おっ……!!

ヌルヌルと乳房を、そしてクリトリスを圧迫されるたびに息が詰まり、頭を殴られるような強い快感で脳みそが混乱する。縛り上げられた全身が病的なまでにガクガクと震え、あっという間にほころんだ秘密から全身の体液が流れ出してしまおうのではないかと

も全身が震え上がり、子宮が炸裂しそうなほど暴力的な心地よさだ。脳みそが快楽というツタでかき回されているよう。しかも媚薬が吸収の早い粘膜に塗布されたのである。膈内全体が狂ったように燃え上がり、入れられているだけで触れられているだけで絶頂が止まらない。

何度絶頂しても、その果てに失神してももっと大きな絶頂に意識を呼び起こされる。

ダークハンターは「エクスタシー」をイヤというほど味あわされていた。

その蜜に誘われた毒樹のツタが、ピンク色の花弁へと差し込まれていく。それだけで

「くあ!? あっ……ちきしょう、この上変態……野郎がっ……!!」

縛るのには慣れているが、縛られることなどには慣れていない。縛りのプロである自分が縛られるという屈辱と羞恥に毒づいてみるが、それでどうなる物でもなかった。暴れて抜け出すうにも、余りにも完璧なオールポントーで身動き一つとれないのだ。

しかもツタが強く巻き付いてくるので胸を覆うコルセットと短パンがすれ、露わになってしまっていた。シミ一つ無い乳房はそれほど大きくもなかったが、根本から絞り出されることで

大きく突き出されてワンサイズはアップしたように見える。挑発的な衣装をしているながらもまだ誰にも見せたことのない縦皺は、怯えたかのように縮こまっている。

「うっっ!! ……え……あ……ひ……いっ!!」

な……何、これえ!!

それでも抵抗を続けていたダークハンターだったが、それも長続きはしなかった。ギチギチと締め上げられる全身が急に熱く火照り始めたのである。肌にツタが食い込む感触は痛みではなく、心地よい痒痒感となって伝わってくる。敏感になり始めた皮膚の上でツタが蠢き、擦過されるとびりびりとした快感が身体の奥へ染みこんでくるようだった。事実、ツタの表面にま

でもあり、それが吸収されていたのだ。「うそ……うそ……こんなの……ふあ……あ、ああ、ああああ……!!」

身体が昂ぶりはとまるというのを知らない。もうこれ以上ないくらいに絞り出されていた乳房がさらに満々と張りつめ、先端の乳首も破裂せんばかりに勃起してしまふ。森を駆け抜ける

生ぬるい風がそこをなでる感触でさえもが極上の快感で、それだけの弱い刺激でも意図がぶっ飛びそうなほどだ。もっと敏感な突起、クリトリスも乳首に負けじと硬くとかけていた。包皮からめくり上がった肉芽はすでに小指の先ほどの大きさにまでなっている。蠢く毒樹はその箇所にもポントーを仕掛けたのである。

ぎちぎちぎちっ、ぎちゅっっ!!

!!! ああああああっっ!!! んぎっ!!!

ダークハンターは白目と泡を剥いてのけぞった。快感神経の束をちぎれそうなほどに締め上げられると、痛いほどの快感が下腹部で炸裂して膈天に突き刺さる。強く絞り上げられたクリだから、媚薬の吸収も早かった。あっという間に女殺しの毒がもっとも敏感な部分を貫いていく。





もつとも言葉が発することも出来ないようだった。

神秘的な雰囲気と漂わせる黒装束は真っ白な粘液に濡れまみれ、無様な斑点をいくつも作っていた。華奢な肉体が時折びくびくと震え、なだらかな乳房ががすかに上下することだけがカースメーカーの少女が生きていることをかろうじて証明している。

「……あ……か……は……あ……あ……ん……ん……」  
それでもその表情は至福そのものであった。それもそうである。普通の人間、いや魔物とでも味わえないような極上で、A機まで吹き飛ばすような濃厚な快楽を与え続けられたのだ。脳内は極彩色のもやが立ちこめ、濁った瞳にはもう男達の姿も見えていない。

カースメーカーはその職業上恨みを酷く買いやすい。それは彼女も例外ではなかった。呪いを受けた者の依頼を受けたカースメーカーの男達が、少女に復讐

を果たしに来たのである。

男達が少女の硬く閉まった秘唇を突き始めた頃には、まだ無反応だった。だが一度絶頂を迎えた時にスギルの本領が発揮される。男達が果てれば果てるほど、快感が倍増していくのである。

「……っおっ……おっ……あ……ん……ん……」  
男達が二度果て始めた辺りから、カースメーカーの少女の様子が変わる。まるでお面のように無表情だった顔に赤みが差し、股間を突かれる度に全身が跳ね上がる。ドロドロとこぼれ出す愛液は白く粘ってきつく匂い、少女の物とは思えぬほどの濃厚さを示していた。

「あ……あ……あ……ん……ん……」  
無田ながらも全身が荒れ狂う性感に翻弄されているのが良く分かった。乳首は乳輪まで膨らむほどに勃起し、クリトリスもまた同様で最奥を突かれる度にうれ

しげにびくびくと痙攣しているのだ。

カースメーカーの男達が用いるハイントレードで、この倍の快楽と、そして自分自身の肉体が度む悦楽が混ぜ合わさっているのである。普通の人間に耐えきれられないような物ではなかった。頭の中で桃色の稲妻が何度かの度もひらめき続け、止むことがない。全身はドロドロに甘く蒸気蒸けて、呼吸をするのが精一杯という有り様。

下半身は度重なる絶頂地獄で感覚が二切無くなり、愛液と同化して流れていってしまったのではないかとと思うほどだった。しかし、それでも男達の復讐はまだ終わらない。わずかな休憩を挟んで陰辱はまだまた繰り返すのだ。

「あ……あ……ん……ん……あ……ん……ん……」  
少女の二穴が再び力強く突かれ始める。人を呪わば穴二つ、とは全くよく言った物だった。







# 金の珍魚亭

## ときとSQ対談

(ざくろ)： 2から入ったから師匠とかメディ子のどこに人気があんだか理解不能だったなあ。ケミ子はまあ高橋せんせ好きそうだなと思ったけど

(高橋某)： たまらんぜあのお堅そうな感じ！

(高橋某)： あの前で粗チンをなじらいたい

(ざくろ)： びりばせんせは誰が好きなんですか

(びりば)： んー、最初はパラ子さんから入ったんですが。

(高橋某)： セイバーですね、わかります。

(ざくろ)： ああ すげえわかりやすい

(びりば)： セイバーっていうなーwww

(びりば)： いや、まあそうなんですけど！w

(びりば)： でも、やっぱりSQ2ではガン子さんにやられたんですがね。ざくろセンセの嫁は誰ですかのん？

(ざくろ)： 金髪ドク子かおさげカスメかで超絶悩んでるのですが…。うーん金髪ドク子かな。ロリババアなのにアホの子くさいのがたまりません！うぎぎ！

(びりば)： おさげカスメのほうが上だと思ってましたが、そういう理由で嫁に決定したのかw まあ、見事にアホの子オーラ漂ってますからなあ。

(高橋某)： うちのPT構成は前衛ベ ブシ子 後衛ガン子 メディ子 いいんちょ

(びりば)： うちのは、前衛ベ レン男 パー子 後衛メディ子 ケミ子 ですね。

(ざくろ)： ベット使い多いなっていうか結構かぶってるのね。高橋せんせのPTは死人が良く出そうだわ

(高橋某)： 比較的やこいPTなのはいなめめ

(ざくろ)： 漏れは前衛ブシダドク 後衛カスバドでしたわ。超攻撃型PT

(ざくろ)： 最初の頃はカスメじゃなくてアルケミ入れて超核熱撃ってたけど。師匠は1層でクビにした

(びりば)： うちもケミ子使いまくってますが、ケミ子さんは強いが燃費に問題があるのが難点！

(高橋某)： あっという間にTP切れした。だが、それがいい（ゴリ

(ざくろ)： ガス欠する設定は結構好きだ。

(ざくろ)： 「切り札は先に見せるな。見せるなら、さらに奥の手を持て」

(びりば)： 逆にあの超火力で燃費が良すぎると興奮するのは間違いないしなー。

(ざくろ)： アルケミ武器何装備しても変わらんのがもったいなかったなー。ゴッドフィンガーないのかよゴッドフィンガー

(高橋某)： 主にHPやTPをブーストするのが役割でしたなあ

(びりば)： 酷い時はTPブーストばかりつけて、一撃喰らったら即死って状態でうろついてたこともしばしば

(ざくろ)： というわけでまた対談のお時間がやってきました。カラー本で対談なんてとんだけブルジョワな紙面の使い方なんだよとお嘆きの貴方。嘆いてるのは俺だ。ざくろです

(高橋某)： ギルド「ばれっと」の中の人。自分のパーティメンバーに自分の同人作品で作ったキャラの名前を付けてしまう痛い人。だがキツキツな妄想をしていない辺りはまだ一線を踏み越えていないようである。高橋です

(びりば)： ギルド名は「アヴァロン」。キャラ名もどこからツッコんで良いものが迷うくらいの月型厨だったりする人； でも、お気に入りのはずのパラ子（セ〇バー）は何故か万年倉庫行きだったりする。……だって、ベットのほうが皆を良く守ってくれるんだもん（=ω=） びりばです

(ざくろ)： 対談としては各自のギルド名を名乗りつつ自己紹介するのが良いような気がするので早速羞恥プレイをしています。おまえらオリジナルの恥ずかしいギルド名つけるよ。ちなみに僕は「エルカーエス」、はいプレイ当時どハマりしてた同人ゲームからですがさっぱりわからないですね。

(高橋某)： しかし小生の記憶ではざくろ先生は唐突にSQ2やり始めたような気がします。がなんでもまだ。

(ざくろ)： なんてだろう ガン子が気になったのかな。1のときはDS持ってなかったのですよ。あとはmixiで異常なwiz好きの人がハマってたりしたからかな。1のデザイン今見るともっさいような気もするけど2のキャラはぶっとんでるのが多くて目を惹いたのは確かだ。ひむかいのろりせんせいすげえ

(高橋某)： おいどんはファーストインプレッションでは大正口マンブシ子だったので

(びりば)： おいらは、イベントの時に連れが持ってきてやってるのがすげえ目についたので。





(高橋某)：結局の所WizもシレンもS0も似たような物で、繰り返しをどれだけ愉しませるかにつぎるゲームですからねえ

(高橋某)：私の中での評価は「とても楽しい作業ゲー」

(高橋某)：……それが世界樹の迷宮なのです！

(ざくろ)：止まらないけどやり尽くすと途端に触らなくなるゲームだよ

(高橋某)：……それが世界樹の迷宮なのです！

(ざくろ)：もうメのお時間？

(ざくろ)：メガテンやったことないんで新鮮でしたよ3Dダンジョンなんてゴエモン2以来だ

(高橋某)：それ巻き戻りすぎ

(高橋某)：あたしはCD-ROM 2版Wiz以来かな

(ざくろ)：ゴエモン2か月風魔伝かどっちかだ

(びりば)：おいらもWIZを軽くやったくらいで、それ以外はちょっと思い出せないなあ。

(高橋某)：ゴエモンにしてもWizにしてもガキの頃はおもしろさがようわからなかったな

(ざくろ)：ゴエモンの3Dダンジョン面で迷って酔って吐いて嫌になって投げてから触らなくなった

(高橋某)：あああ

(高橋某)：わかりすぎて思い出しゲロしそう

(高橋某)：ポートピア連続殺人事件のこうぞうのたしきでゲロ吐いたのが3Dはつだった

(ざくろ)：おガキ様には空間把握能力が備わってないんですよ。永遠に同じところグルグル…

(高橋某)：今のおガキ様ってS0やってたのしいと思うんだらうか？

(ざくろ)：漏れは靴音に感動したけどなあ…

(ざくろ)：R0のスキルツリーシステムは楽しいと思うんだけど

(高橋某)：3Dゲーは大人のたしなみということでムズイというか特に目的もなくダンジョンをうろろろする意味が分からないのではないかと

(ざくろ)：そんなもんですかね。ドラクエ好きな奴ならレベル上げという単純作業自体が楽しいと思うんだけど

(びりば)：キャラのカスタマイズできる分、ドラクエよりレベル上げるのも楽しいと思うし。

(ざくろ)：ゲーム外の時間でも妄想できるゲームはいいゲームだよ。TCGでどうデッキ組むかみたいはどうスキル取ってか考えるのが楽しい

(ざくろ)：そういうの繰り返しするとキャラに愛着沸くんだよなー。台詞もなににもないのに。

(高橋某)：妄想といえば、ギャップもいいわけで

(高橋某)：実に萌え絵でハーレムパーティでもやってることはすげえバイオレンスな感じがまた

(ざくろ)：初めての全滅は当然のようにシカでした。後半はあんまり全滅しなかったがHG持ちのバード年中入れてたからレベル高かったせいかしら？

(高橋某)：ハードゲイ持ちですね、わかります

(ざくろ)：ハードロリカ(ちから)！

(ざくろ)：ロリカハマタ\(^o^)/

……おあとがよろしいようで。



(高橋某)：まあ魔法の少女が杖が一本有ればあとはどうとでも

(ざくろ)：間違っていないんだけど最近の魔法少女は武闘派が多いな…。便利な世の中だわ

(高橋某)：アルケミさんも(いいんちよでなくても)絵面だけ見るとかなり武闘派なのよね

(びりば)：いつの間にかそれが当たり前になってますのう。

(高橋某)：あの錬金術発動機がなんとも。

(びりば)：魔法少女というより、むしろハ0レンと言うべき風貌ですからの：

(ざくろ)：ハガレンが出るかGガンが出るかカルドセプトが出るかで世代がわかります

(ざくろ)：ガン子は前評判高かったけどゲームやったらうなぎ下がりだったなー。

(びりば)：おいらも買ったときには「こいつ絶対使う！」と思ったのに、いつの間にか倉庫行きになってた罌が：

(ざくろ)：器用貧乏なのがいけない

(高橋某)：ドラッグバレット美味しいです

(ざくろ)：取ったけど使った試しがないわ

(びりば)：回復役がドク子メインの時期には多少使ってたー

(高橋某)：回復役のドク男です(^A^)

(高橋某)：ドクオッ！ドクオッ！

(ざくろ)：あれメディ子使ってたんじゃないの？

(高橋某)：実はそう。封建的なパーティ構成でした

(ざくろ)：ドク子派は漏れだけかー。ひとりじめしちゃうよちゅっちゅっ

(高橋某)：そう、聞いてみたいことはあるのですよ

(高橋某)：正直なところS0は面白かったですが、いわゆる懐古ゲーですが。

(ざくろ)：図鑑コンプするまでやりました

(ざくろ)：世界樹の面白さはネバーゲーみたいな感じだと思ったな。スネオとかイクサとかアスカとか。

(ざくろ)：もしくは俺屍

(ざくろ)：なんというかマップ書き残しがあると寝るに眠れずまた潜ってしまうとか

(高橋某)：中毒性高いね

(びりば)：俺屍なつかしいーw うちは全階層制覇くらいはなんとか出来ました。







■あぶりだしざくろ（表紙、裏表紙、02～07、08塗り、10塗り、11～15） / ドウガネブイブイ

どもですざくろです。  
今回はセカキューのカラー本ということでめたんこ楽しく作業できた気がします。高橋せんせ、びりばせんせ  
ご協力どうもありがとうございました。いやー1週間でカラー10枚近く塗れるもんだなー。でも世界樹じゃ  
なかったら到底モチベーション（※もちでオナニーすること）持たなかったと思うわ。はわわドク子結婚してくれ！

is- savant

■ <http://zaku6.sakura.ne.jp/>

■高橋良喜（SS） / Palette Enterprise

長編というのも難しい物ですが、こういう超短編を九本ひねり出すというのも  
また難しい物です。彼女達の冒険が皆様の夜の冒険のお供になることを祈りつつ、  
またどこかの迷宮でお会いしましょう！

Palette Enterprise

■ <http://www.palette-e.com/>

■ B-RIVER（08線画、09、10線画） / H・B

えー、今回一番働いてなかったりします： お二人共、どうもすみませんでした…orz  
でも、エロエロフルカラー本は今回初参加なので楽しかったですよw  
世界樹3が出ることを願いつつ、忙しい最中に出ないことを祈る今日この頃です。

Palette Enterprise

■ <http://www.palette-e.com/>

◆心萎えよ肉には眠りを（汝が持てる全ての抗う力、働くこと能わず）

2008.08.17 / C74

2008.09. / 2版

発行：ドウガネブイブイ

著者：あぶりだしざくろ 18

<http://zaku6.sakura.ne.jp>

[zaku6@jcom.home.ne.jp](mailto:zaku6@jcom.home.ne.jp)

禁無断転載・複製・複写

印刷：PICO



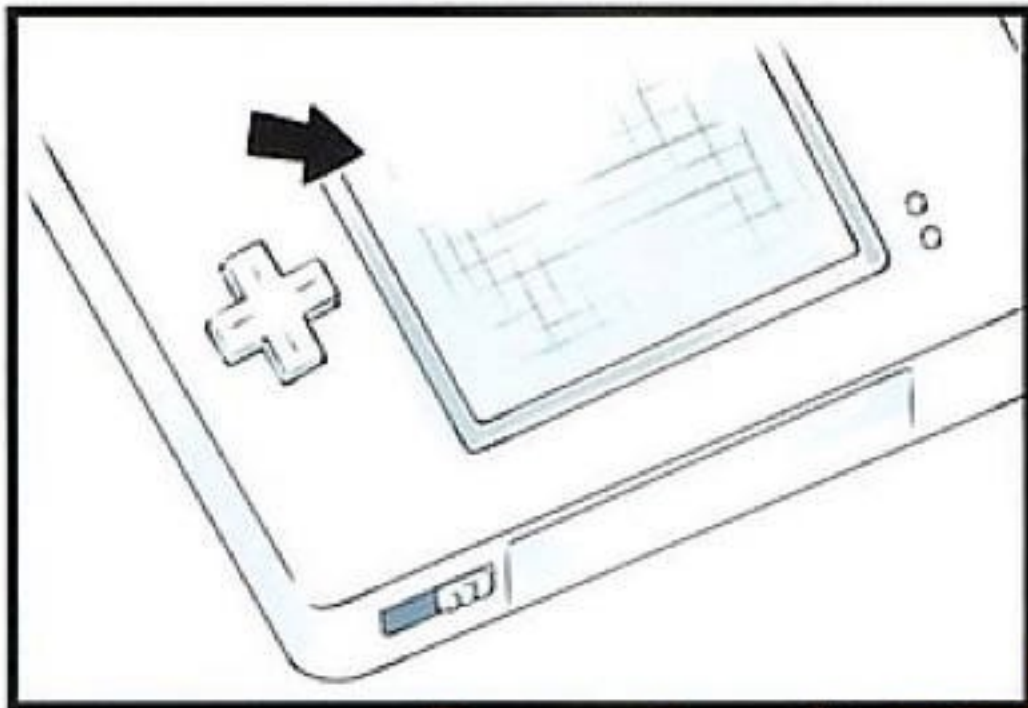


世界樹の傷跡 2



Aボタンが潰れている……

世界樹の傷跡



マッピングのせいで  
基板の目状に傷がああああ  
あああ

まだ1年も使っていないのに壊れるよ……

2008  
ドラッグストア  
セカキュート